

総合表現のこころみ

—音・動き・素材の探求を通して—

智 原 江 美
下 口 美 帆
和 田 幸 子

I. はじめに

報告者らは平成26年より子どもらの生活に密着した表現を適切に受け止めることのできる豊かな感性を持った保育者養成を目指して、養成校での授業に取り組んできた。学生が音楽・造形・身体・言葉の各表現分野を連携させた活動の計画・実践ができるよう、複数の表現分野を連携させた総合的な表現の授業を計画し検討を重ねながら授業を実施してきた。

平成27年の本学こども教育学部設立時に「保育内容V（総合表現Ⅰ～Ⅲ）」（以下「総合表現Ⅰ～Ⅲ」とする）の科目を幼稚園教員及び保育士養成課程のカリキュラムに設けた。「造形表現」と「身体表現」を連携させた科目を「総合表現Ⅰ」、「音楽表現」と「言葉表現」を連携させた科目を「総合表現Ⅱ」とし2年次の履修科目とした。さらに4分野すべてを連携させた「総合表現Ⅲ」を4年次科目として設け、平成30年度に開講した。これらの「総合表現」の授業では、いわゆる総合芸術としての劇やミュージカル、オペレッタではなく、身近な自然やものの音・色・形・感触などを様々な方法で表現することに重点をおいて取り組んだ。

筆者らと同じような問題意識を持ち、総合表現の授業開発に取り組む実践も見られる。山田・滝沢・横田による造形・音楽・身体表現を連携させた保育内容「表現」の授業実践では6年にもわたり考察を行い、授業展開の修正を重ねている¹⁾。

本報告は、2年次に「総合表現Ⅰ・Ⅱ」を受講し、実習等で現場での活動を経験した学生の4年次での4分野を連携させた「総合表現Ⅲ」の授業の取り組みを振り返り、その学びを検証するとともにより豊かな感性を身につけた保育者養成に向け、今後の総合表現の授業展開に関する課題を検討することを目的とする。

II. 授業の概要

本活動は大きく3段階に分けて実施した（表1）。

第1段階では「素材（造形表現）」「声・音（音楽表現）」「動き（身体表現）」の3つの活動に分かれて行うことで、それぞれの面白さや魅力をより深く味わう体験とした。また、各活動をつなぐものとして、各授業の最後に「自分の心の動きや感じたこと」を模造紙に描画やコラージュで表現し、3回の心の動きが蓄積された表現となるようにした。

第2段階では各表現分野を融合させた活動として教員主体で実施し、総合的な表現を体感できるようにした。具体的には、3回の活動の模造紙鑑賞、造形分野で制作した「手触りの散歩道」を並べて一つの流れをつくり発表する、それをもとにオノマトペを描画と造形で制作してつなげ、オノマトペの楽譜「オノマトペ譜」を制作、最終的にはそれを身体で表現した。

第3段階ではこれまでの経験をもとに、各グループで絵本・図形楽譜・歌²⁾をもとにした創作表現を行い、園児を対象として発表、記録映像をみて振り返りを行った。

III. 授業の実際

(1) ガイダンス

【第1回】

授業の概要と目標、計画を伝え、作品創作へのイメージを捉えるためのガイダンスを行った。その後、くじにより6～7名ずつの6グループに分かれた。それぞれ、あか、みどり、オレンジ、もも、き、きみどり、のグループ名とし、グループ用ファイルの表紙を作成した。

表1 平成30年度総合表現Ⅲ 15回の流れ

	回	テーマ	内容
	第1回	ガイダンス	内容説明・グループ分け・グループのファイル制作
第1段階	第2回 ～4回	表現素材の探求	「素材の探求」：身の回りの素材を道のように並べコラージュして、手触りをことばで表す 「声・音の探求」：楽器の響きを聴く、声による表現、紙コップを用いたリズム遊び 「動きの探求」：ボディソックスを用いて音を体の動きで表す *各回の心の動きを模造紙に描画・コラージュ等で表現
第2段階	第5回	表現素材の連携	3つの探求テーマをクロスさせた活動 各活動の振り返り、オノマトベ譜の作成
	第6回		オノマトベ譜を身体の動きで表現
第3段階	第7回 ～9回	グループ創作と発表	提示された絵本・歌・図形楽譜から、一つ選択する ・絵本『ごぶごぶごぼごぼ』（駒形克己著） ・歌「ぴっとんへべへべ」（おおたか静流作詞作曲） ・図形楽譜（「〇の話」はらっぱ de 楽譜集①） ・絵本『ぱびぶべぼーいろながれかたちちうごいて』（元永定正著） ・絵本『あみだだだ』（谷川俊太郎著・元永定正絵・中辻悦子デザイン） ・絵本『いろいきてる!』（谷川俊太郎著・元永定正絵） 選択したモチーフを基に身体の動きを創作する *各回最後に活動報告を行う
	第10回		作品の中間発表と他のグループの鑑賞
	第11回		作品の修正、改善点の発表
	第12回		司会進行・プログラム作成・作品解説作成の3つに分かれて活動する
	第13回		進行も含めた全体でのリハーサルを行う
	第14回		幼稚園3～5歳児を対象として発表する
	第15回		ビデオ撮影した作品を鑑賞する 授業の振り返りレポート

(2) 第1段階（全3回）“表現素材の探求”

【第2回～4回】

3名の教員がそれぞれ「素材の探求」「声・音の探求」「動きの探求」をテーマに1時間ずつ2グループごとに担当した。学生は3回に渡り、これら3テーマのワークショップを体験したことになる。各活動のつながりを意識させるための工夫として、それぞれの授業の後半部分では、体験した心の動きを模造紙に造形表現として表すことを積み重ねた。次にそれぞれのテーマの活動を記す。

「素材の探求」（担当一下口）：本活動では「手触りの散歩道」というテーマで、布・紙・ビニール・梱包材などの様々な素材を組み合わせて道路状にコラージュする作品を制作した（表2）。「手触り」という身体感

覚を研ぎ澄ませながら、材料を選び、画用紙に貼っていき、できたものをまた手触りで確認するプロセスを繰り返しながら作っていく体験となった。さらに、できた作品の触り心地を「ふわふわ、さらさら、つるるる～～」のように言葉で表現した。表した言葉を紙に書いて交換し、どの言葉が誰の作品か当てる遊びも行った（図1、2）。

本題材は、造形表現という分野において視覚だけでなく、触覚や聴覚という「身体」の感覚やオノマトベという「声の響き」による表現など、多様な感覚や表現を往還しながら表現を作り上げていく体験を意識的に行ってもらいたいという願いから設定されたものである。学生たちは、並べられた材料を一つ一つ手に取りながら感触を味わって選び、オノマトベで表現する

表 2. 「素材の探求」活動記録

時間	学生の活動	目的	環境構成・準備
0:00	○「手触りの散歩道」を制作する ・テーマと取り組み内容について説明を聞く	・「散歩道」という時間と空間を意識した作品作りを行う ・触覚や言葉を意識しながら制作に取り組む	・作例
0:05	・台紙を選ぶ ・素材を選ぶ	・自分が表現したいイメージの色彩を考えて台紙を選択する ・素材を「手触り」という身体感覚を研ぎ澄ませながら感じる	・12色の色画用紙（八つ切りサイズ） ・各種素材 ＜面状素材＞ 新聞紙、クラフト紙、コピー用紙、古布（綿、絹、レース、絞り染め布など）、エアキャップ（プチプチと称されることが多い）、発泡紙、お花紙、波段ボール、アルミホイル ＜線状素材＞ 紙テープ、スズランテープ、麻紐、毛糸 ＜身の周り素材＞ ストロー、スチロールトレイ、プラスチックトレイ、フルーツキャップ（果物を包む発泡素材の網）、銀カップ、手芸用わた、紙パッキン（緩衝材として使用される、紙を細く切ったもの）
	・選んだ素材を台紙に貼っていく	・コラージュ（貼り合わせ）技法を通して組み合わせの面白さを味わう	・道具 スティックのり、セロハンテープ、両面テープ、木工用ボンド、ホチキス、ハサミ、穴あけパンチ
0:30	○オノマトペで表現する ・台紙2枚にオノマトペを書き、一枚は作品裏面に貼付、一枚は提出する	・できた作品をオノマトペという「言葉」で表現する	・コピー用紙 10 cm× 42 cm を各自 2 枚
0:45	○あてっこ遊びをする ・提出した方のオノマトペ用紙をくじ引きのように引き、引いたオノマトペがどの作品かを触りながら探してあてる	・他の人の作品を鑑賞し、良さや面白さを見つけ、表現の多様性に触れる	
1:00	○模造紙の活動	・その日の心の動きについてクレヨンで表現する	・各グループの模造紙・クレヨン ・線で味の変化をを表現した作例
1:20	○振り返り	・その日の活動について、自己の学びを振り返る	・振り返りシート



図 1 「手触りの散歩道」完成作品



図 2 「あてっこあそび」の様子

段階では落ち着いた雰囲気です。ペンを片手に、手で何度も作品を触りながら一つ一つオノマトペをつぶやきながら書き留めていた。あてっこ遊びでは他者の作品を慎重に触りながら推論しており、全体を通して多様な感覚を使いながら活動に取り組めた様子が伺えた。

学生の振り返りからは「普段は色とか手触りに注目することは少ないが、手触りをあらためて感じる事ができた」「自分なりにオノマトペを考えて肌触りを感じながら道を作った」「同じ材質のものでも折り方、貼り方の違いで感触が変わってくる。同じものだからといって同じ感触だとは思わずに、様々な工夫を加えて違う感触を探すのも面白いのではないかと思う」といった自己の感覚の広がりを感じたもの、「感覚を言葉で表すと人によって表現が違うということが面白いと思った」「同じ素材でも工夫によって違う手触りになったり、人によって色んな工夫がみられて面白かった」という多様性への気づき、「子どもだったらどん

な作品をつくるかな」といった保育者としての視点、などの学びが見られた。

「声・音の探求」(担当一和田)：まずじゃばらに折った和紙に絵の具を含ませる折り染めを体験した後、円形にならべた椅子に座り、隣の人へ手拍子を送っていく手拍子リレー、前方の目のあった人にお手玉を投げ渡す活動を行った(表3)。この際、お手玉が手を離れている間、声を出すことを試みた。またトーンチャイムを一人ずつ持ち、響きが消えたら次の音を鳴らす音リレーをしながら隣に回していくという活動を行った。折り染め紙をちぎったり切って、模造紙に貼ってグループの表現記録とした。

まず、「普段、あー、などと長い音を発することがなかったのととても新鮮だった」と声を出すということ意識的に行う活動に興味を持って取り組んだ(図3)。続いて楽器で音を鳴らす活動も、円になって隣の

表3. 「声・音の探求」活動記録

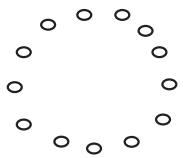
時間	学生の活動	目的	環境構成・準備
0:00	○折り染めをする	・色がにじんでいく様子を楽しむ ・出来上がった模様を楽しむ	・障子紙、絵の具(薄くとしたもの)、新聞紙、はさみ、洗濯バサミ、古タオル、
0:15	○手拍子遊びを楽しむ。 ・手拍子リレー(隣の人に回す) ・一人ずつ、目のあった人に向けて手拍子をする	・手拍子を受け渡すことを意識する。 ・手拍子を目当ての人に向けて鳴らし、受け取ってもらおう楽しさを味わう	・椅子を円形に並べて座る 
	○お手玉の受け渡しリレーをする ・飛んできたお手玉を受け取らない、という遊びをする	・お手玉を目当ての人に向けて投げ、受け取ってもらおう楽しさを味わう ・受け取らずにお手玉が落ちるけだるさを感じ	・お手玉
	○声遊びをする ・お手玉を投げて手を離れている間、発声を続ける。(高い声、低い声、大きい声、小さい声)	・長音で発声することを楽しむ。いろいろな種類の声を出すことを楽しむ	
	○楽器遊びをする ・大きな音、小さな音で鳴らす ・音のリレー(響きが無くなったら隣の人が鳴らす)	・音の響きに気づく ・長い響きを聴くことを味わう	・楽器(籐の鈴、カウベル、レインツリー、ギロ、チェンチェン、キャンディドラム、ビブラスラップ他)
	○トーンチャイムを鳴らす。 ・一斉に鳴らす ・一人ずつ鳴らす ・音のリレー ・目のあった人と同時に鳴らす	・他者とタイミングを合わせて音を鳴らす楽しさを知る ・自分の鳴らした音に耳を傾け、他者の鳴らした音に耳を傾ける ・生じたハーモニーを味わう	・トーンチャイム
1:00	○模造紙に折り染めを貼る	・時間中に感じた心の動きを振り返る。	・グループの模造紙、のり
1:20	○振り返りシートに記入する		



図3 声遊び

人や、向かいに座る人に音を伝えるという仕方ので進めたので、「みんなの表現の仕方がダイナミックになっていった」のがおもしろかったようである。音の向かう方向が感じられるようになっていくこと、そして音そのものを聞くことの心地よさを体験した。音を鳴らすことは楽しいことであり、また音の響きやリズムを味わい、伝え合うことによって、コミュニケーションとなることがわかった。

【動きの探求】(担当—智原):本テーマでは『ボディソックス』を着用してオノマトペ、カホンやブームワッカーなどのリズムに合わせて自由に動くグループと鑑賞するグループに分かれた活動した(表4)。伸縮性のある素材のボディソックスを身につけることにより身体の動きにより素材のラインを生かすことができ、身体のみ表現とは異なった表現の面白さがみられた。顔部はボディソックスを被ることから恥ずかしがらずに表現できたといった感想や、視覚をもとにした時とは異なった人との距離感などを感じることができたという感想が見られた。

これら一連の活動を経験した学生の感想として、「オノマトペの音を動きにすることを意識して行うのは新鮮で楽しかった」、「ボディーソックスは動きが制限される分、異質な動きや形を楽しめ独特な表現が生まれると思った」などが上がり、ボディーソックス特有の伸びたり縮んだりする感触の面白さやボディーソック

表4. 「動きの探求」活動記録

時間	学生の活動	目的	環境構成・準備
0:00	<ul style="list-style-type: none"> ○ウォーミングアップをする。 ・じゃんけん列車をする。 ・「畑のポルカ」を踊る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動くためのウォーミングアップとして、重たい機関車やスマートな電車等に各自が思い思いの列車になってじゃんけん列車をする。 ・リズムに合わせて列車になって動く。 ・軽快なリズムに合わせて「畑のポルカ」を踊る。 ・ジャンプの動きの個所ではしっかり跳躍をして運動量を確保し、体を動かすことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育実習室で広い空間を用意する。ピアノで様々な速さ、高さなどでじゃんけん列車の曲を弾く。負けた場合は長く連なるのではなく、2両以上の列車にはならないようにし、先頭を交代できるようにする。 ・CD デッキ、CD「畑のポルカ」
0:15	<ul style="list-style-type: none"> ○オノマトペを表現する。 ・オノマトペに合わせて感じたことを身体動きとして表現する。 ・音の違いを意識して同じようなオノマトペをグループごとに動きで表す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・擬音語・擬態語を聞いて感じたことを身体表現として表す。 ・「ふわふわ」、「べとべと」、「さらさら」など、指導者の言ったオノマトペを各自で表現する。 ・音が似通っている「くるくる」、「ぐるぐる」、「くーるくーる」、「ぐるぐるん」、「くるんくるん」、「ぐるんぐるん」から感じた差異も含めてからだで表す。 	
0:40	<ul style="list-style-type: none"> ○ボディーソックスを着用して身体表現をする。 ・ボディーソックスを茶着用して動く。 ・打楽器の音に合わせて自由に動く。 ・打楽器のリズムに合わせて動く。 ・発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての用具であるので、全員が一度は被って動いて素材の感触や可動域などを感じる。 ・ボディソックスを着用して動くメンバーとグループで選んだ打楽器演奏に分かれ、打楽器の音色やリズムに合わせて動く。ボディーソックスを被ることにより表現が変化することを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボディーソックス M, L, XL ・ブームワッカー、ウッドブロック、木魚、体育用太鼓、トライアングル、タンバリン、すず
1:10	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の活動を経験して感じたことを模造紙上に作品として表す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・オノマトペの表現やボディーソックスを着用しての活動を各自が選んだ素材で表す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・和紙、モール、毛糸などの様々な手芸素材、ボスカ、のりなどを用意する。
1:25	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返りシートを記入する。 		

ス自体が表すラインの面白さ、他人の視線を気にすることなく表現できるといった特色についての記述がみられ、感じたことを身体で表現することへの恥ずかしさなどが少し薄らいだように見受けられた（図4）。

（3）第2段階（全2回）“表現素材の連携”

【第5回】

「素材の探求」「声・音の探求」「動きの探求」の経験を声と身体表現でグループ毎に発表した。その表現をオノマトペで表し、さらに画用紙等の素材で表し、オノマトペ譜（図5）としてまとめた。

【第6回】

「素材の探求」「声・音の探求」「動きの探求」の経験をもとに、グループ毎に「〇〇の散歩道」のテーマで声・音・動きによる3分間の表現発表をした（図6）。空間を大きく利用した表現、向こうへ歩いて行くような表現が見られ、時間経過に伴う変化も見られる表現であった。これは、テーマを散歩道、としたことから距離感、空間性と時間経過の概念が加わったと考える。

（4）第3段階（全9回）“グループ創作と発表”

第3段階は前半と後半部分に分けられる。前半は第7回から9回のグループ創作開始期である。グループ創作では、表1の6つの絵本・歌・図形楽譜から1つを選び、そこに含まれるモチーフを基に5分間の総合表現を行うこととした。各グループが創作のモチーフを見つける手助けとなるように室内には大布、オーガンジー生地、リボン、民族楽器を置き自由に触れるようにした。創作した基本モチーフ、楽器・声・動き・素材の効果的な使用、空間の使用、準備物について、グループワークシートに記録させた。第10回で中間発表会を行い、第11回は動画記録を見ながら修正作業を行った。

ここまでで各グループの創作は出来あがり、第12回の発表会の企画、第13回のリハーサルを経て第14回にはK幼稚園3～5歳児34名を招いて発表会を行った。第15回は授業の振り返りレポートを①「3つの探求テーマに分かれての活動で体験したそれぞれの内容はどのような形で今回の作品創作・発表に活かされましたか」と、②「今回の一連の活動を経験して、表現の仕方、感じ方などに関してあなたの中で変わったことは何ですか。またそれはいつ、どのように変化し



図4 ボディーソックスを着用しての活動



図5 オノマトペ譜



図6 「〇〇の散歩道」の活動

ましたか」の2つの内容で記入させた。

（5）グループ創作の実際

6グループそれぞれの創作過程と発表の様子をグループワークシートと教員による観察メモから記す。

オレンジグループによる『ごぶごぶごぼごぼ』（駒形克己著）をもとにした表現創作

初回は絵本を読み込み、作品の面白さについて「穴が開いていてページをめくるのが楽しい」「シンプルな音でいろんな表現ができる」と自分たちが感じた事を率直に意見交換していた。その後グループ内でイメージを深めて「ごぶごぶ ごぼごぼの音（言葉）の響きやまるい形や色合いなどから水の世界を感じ、その中でも音の響きに注目し、「楽器」「身体」「声」を使って水の世界を表現する」と方針が定まった。

2回目の活動では絵本の記述「じゅわじゅわじゅわじゅわー」から音としてチャフチャス（楽器名）を鳴らしながら、オーガンジーをかぶり集まってからまるという動きをするといった、「本の内容」「音」「動き」の3要素を対応させながら考え出していた。3回目には全体の流れが意識され、始め方や登場順などを決めていた。その後中間発表を経てその映像を視聴したことから、空間の使い方が意識され、環境図が描かれた。また、身体の動かし方についても「重心を低くする」「チューチュートレイン（筆者注：縦列に並んで上半身を時間差で回転させる動き）を上手にする」また、「服装をそろえる」と、観る側の視点を意識しながら、自分たちの表現がよりよく見えるためにどうすればよいかという客観的な視点も生まれていた。発表当日はオーガンジー布やトーンチャイムなどを使いながら、流れを感じさせるのびやかな身体の動きと声で、グループの独創性が感じられる表現となった。

きみどりグループによる「ぴっとんへべへべ」（おおたか静流作詞・作曲）をもとにした表現創作

ことばの響きを重視して、歌っているだけで楽しくなるような言葉で構成された歌である。NHK教育テレビ「にほんごであそぼ」で放映されていた。活動初回は歌のサビ部分「ぴっとんへべへべ」「び～よらんたん」の部分に注目し、「言葉に意味はない」ことを「重要」だとし、音の連なりを意識していた。また、言葉の頭文字「び・り・え・も・び・る」の担当を決め、それぞれ画用紙を使い、頭につけられるものを制作していた。動きについては楽器を手に取り、一人ずつ登場して文字を名乗るなどの工夫をしながらも、中心としては既存のテレビ放映されていた動きを熱心に練習していたが、中間発表の次の回で自分達の発表映像を視聴してからは「歌う前に文字を体で表現する」「動きを変えてぴっとんへべへべを歌う」と方針を変更し

て、最初から動きを検討しなおしていた。最終的には言葉の響きから自分たちが連想した動きを「はないちもんめ」のように2グループが対面になって繰り返すという独自の表現になっていた。また、「楽器からマントに変更する」「人と人が重ならないよう、配置に注意する」「動きを覚える→スムーズに」「自然な表現を心掛ける」など、考えた動きを表現として高めるための考察も深まった様子が記録用紙より見て取れた。

きみどりグループによる図形楽譜「○の話」をもとにした表現創作「おばけのぼうけん」

図形楽譜『○の話』を何にも縛られず表現できると考え選んだのだが、「いざ表現となるとヒントのなさに途方に暮れた」と記している。わからない中で、この図形楽譜を見つめつづけていると、この全体の形が「おばけ」のように見え、この図形がたどる線は「散歩道」に見える、と気づいた。そこでおばけが散歩していくイメージで図形楽譜を解釈していった。「①」「②」「③」と図形楽譜に書き込み、それぞれの部分を2人ずつで表現のモチーフを考え、提案することになった。①渦巻きのような図形の部分は「くるくる」とオノマトペで唱えながら舞い降りてきて着地する・長い棒を持って散歩する・横歩きで移動する、②集まっては散っていくイメージの表現と、「カッチ、カッチ」のオノマトペで時計の針の動きを表して時間が経っていくイメージの表現、③ひらがなの「ひ」に見える部分は「ヒヒヒヒ」のオノマトペで表現、各担当の2人から出た表現のモチーフで、「とりあえず動いてみよう」と動きながらグループ創作に取り組むことになった。この時のことを「座って考えるよりもずっと表現の幅が広がるということに気がつくことができた」と記している。

未完の状態でも中間発表を迎えた。その動画を見て、未完成であることよりも、一つ一つの表現が不十分で「ものに頼っているということに気づいた」と記した。手具の良さを活かす動きを考えてきたのだが、そうではなく動きそのものを尊重し、深みを出すために手具を使うという位置づけにした。以後6人の集中力が増し、修正作業が進んでいった。最終的に手具はオーガンジー布、スズランテープ、楽器はトーンチャイム、レインツリー、ウッドブロック、ロリポップドラムを用いて創作表現に仕上げ、「おばけのぼうけん」と名



図7 きみどりグループによる「〇の話」をもとにした表現創作

付けた(図7)。

あかグループによる絵本『ぱびぶべぼ—いろながれかたちうごいて』(元永定正作)をもとにした表現創作

五七五の語調のこばに導かれ、色が流れ、形が変化する時間の動きを表した絵本である。表現素材を生かして表現するにはどうしていいかわからず相談が難航した。そこで教員はこの絵本に出てくる五七五の語調を多様な方法で表現できるといいのではと助言した。グループで何回も声を出して読み、「びびびびび どかんぱちぱち いろはなび」「きらきらとかがやくいろに るんるる」「いろいろと みどりながれて ははははは」の3場面を取り上げて表現することにした。それぞれの場面が何を表すかと意味を探るのではなく、「いろはなび」と言っでは力いっぱい飛び跳ねる(図8)、「るんるる」は陽気さを出すようにコミカルに動く、「ははははは」はいろいろな声の高さで笑い声を発する、というように、語感の表現を探っていた。さらに、歩く様子を「てけてけて てけてけて てけてけて」とのオノマトペで表現することを考え、そして「くるくるる くるくるくるる くるくるる」とその場でひたすら回り続ける表現も自分たちで考えて挿入した。中間発表の動画を見て、立ち位置が重なっていてよく見えないことに気づき、改善点としたほか、「誰よりも大きな表現を心がけるように」変わっていった。語調を生かし、大きな身体表現が続いたことが特徴的であった。

みどりグループによる絵本『あみだだだ』(谷川俊太郎 文・元永定正 絵・中辻悦子 構成)をもとにした表現創作

「あみだだだ」の繰り返しのフレーズからはじまる



図8 あかグループによる『ぱびぶべぼ—いろながれかたちうごいて』をもとにした表現創作

五・五・七・五のリズムを用いて、あみだくじを表現しており、知らず知らずのうちに不思議なあみだくじの世界に引き込まれていく絵本である。担当グループは、唱えるような語りと鐘の音・カホンのリズムに合わせてあみだくじの世界を表現した。「絵本の中のあみだくじには決まりがなく、色と線の世界を自由に楽しんでもらえるよう工夫した」と振り返りシートに記述がある。指導者側からの指示として、この作品では必ずボディーソックスを用いて(使用方法は自由)作品を作ることを課題として示した。ボディーソックスで表されるラインであみだくじを表現すると効果的ではないかと考えたからである。創作の過程で、あみだくじの直線的な形を視覚として伝えられるよう縄を使ったり、上がったたり下がったり、ときには曲線であらわされるあみだくじの様子を空間として表現することについて議論を重ねていた。

動きに加えて声やリズムの表現の仕方についても様々な楽器を使って試行錯誤を重ねている。「あみだだだ」のフレーズでの声の出し方、使用する楽器の種類を数回の授業にわたり検討している。当初はブームワッカー、太鼓、ウッドブロックを使用して作品制作を進めていたが、最終的には最初から最後までカホンで一定のリズムを鳴らし、タンバリンや木琴を追加した表現へと変化していった。また作品の最後にはあみだくじと阿弥陀さまをかけた内容の詞が出てくることから、仏様やお経をイメージできる鐘の音を取り入れている。

ピンクグループによる絵本『いろいきてる!』(谷川俊太郎 文・元永定正 絵)をもとにした表現創作

様々な色がまるで命をもって生きているように行動し、表情を変えていく様子を描いた絵本である。この作品では様々な色の約1m四方のオーガンジーの布を用いることを課題とした。グループのメンバーはいろいろな色のオーガンジーの布とブームワッカーを用いて、色が流れ、広がり、歌うといった多様な色のイメージを表現した作品を創作した。絵本のページごとに表情を変え、色がうねり、ささやくなどの色の不思議な様子を感じられるような雰囲気味わえる創作作品づくりに重点を置いて取り組んだようである。今回の作品創作には具体的な言葉は用いないという条件であったが、この作品に関しては「いろ」という名詞だけは使用して良いこととし、「いろ」と発声したあと、続いて様々な状態をブームワッカーを中心とした音とオーガンジーの布を用いた動きで表すよう検討を重ねていた。色が感情を持って行動する様子の面白さをどのように表現するのがよいのか、一つ一つの動きを丁寧に大きく表現することを大切にすることで子どもに伝わるのではないかという振り返りシート記述がみられた。次々と変わる色の変化の様子をどのように繋いでいけばよいのかという点に苦労をしたようである。

また、今回の発表は観客の前方にある舞台上で発表するという形式ではなく、保育実習室の子どもの座っている床と同じ平面、子ども達の周囲360度の空間全体を舞台とした。鑑賞している子ども達の上の空間を布を持って往復するという、色の布で子ども達の上部空間を覆って色の雰囲気を感じてもらうといったような工夫も行っていった。

Ⅳ. 考察

1. 本授業実践の特徴

本授業展開は、表1で示したように第1段階、第2段階、第3段階の過程を踏んですすめた。第1段階では「素材」「声・音」「動き」の3テーマで表現の可能性を探求した。第2段階では表現素材の連携を体験した。この時の創作表現で距離感、空間性、時間経過を感じられるものが生じてきた。これは第3段階でのグループ創作に生かされていくことになる。身体を大きく動かし、空間を大きく感じながら音、声を伝えようとする意思が生じ、表現モチーフに変化をさせながら5分間の創作表現に仕上げていくこととなった。先に

あげた山田・滝沢・横田の授業実践では造形・音楽・身体表現の3つの経験順によって創作表現の成果が異なる結果となるがゆえ、授業展開を修正していると報告している。筆者らの授業実践で第1段階にあたる過程の再検討だと考えられるが、本授業においては「素材」「声・音」「動き」の3テーマの表現経験はそれぞれ独立した活動であり、第2段階ではじめてそれらの連携した表現を試みているゆえ、改善すべき問題は現段階では見当たらない。むしろ学生の葛藤が生じるのは第3段階のグループ創作過程である。グループごとのテーマを解釈し、第1、第2段階で経験した表現のアイデアをもとにしながら意見を出しあい、表現としてまとめていくことは、学生にとって自分のアイデアと他者の考えをすり合わせて行く作業であり、相互の信頼と気遣いの中、少しずつ進捗していく。

2. 第1段階の意義

第1段階は「表現素材の探求」と位置付ける。「素材の探求」「声・音の探求」「動きの探求」をテーマに3週に渡り2グループごとにワークショップを経験した。第1段階の活動が第3段階の表現に具体的にどのように活かされたかについて期末の振り返りレポートでの記述をあげてみる。

「素材の探求」のワークショップを第3段階での表現に活かした記述として、「素材を活かして一つの作品を作ったり、一つ一つの素材を擬音で表したりといった活動が、隣の人とつなぎ、線に見せるためにひもをつかうという提案につながった」「画用紙の上で散歩道を表現する活動を通して、おばけの散歩道というアイデアに活かされた」とあり、経験したことを自分なりに解釈し、自分たちの表現にも適用した事例がみられた。

「声・音の探求」のワークショップからは、「声の大きさ、長さの違いでさまざまな活動になる」「音を投げるのを取り入れた。その音にあわせた動きがあるとその方を見てしまいます」との記述があり、音、声には、大きさ、長さ、スピード感の差、伝わる方向があり、それらを意識的に生じさせることによって表現が多様におもしろくなることへの気づきが見られ、第3段階に生かされたと考えられる。また、「声の通りやすさ」と表現した学生がおり、声・音という素材の純度への気づきがあったと考えられる。

「動きの探求」のワークショップからは、「動きの早さや大きさを変えることで印象が違う」「深く、大きく、ずっしりと踏み込むことにより作品の中で違いをつけた」との記述があり、スピード、大きさ、重量感を意識してエネルギーを向けて表現創作に臨むようになっていたことが推察できる。

また、「触り心地から音あてをする授業のように、ボディーソックスの触り心地がサラサラツルツルだったり、よく伸びることから『ピーン』『ビヨビヨ』など質を音で考えることが連想され、動きにつなげることができた」「ゆっくりとしたリズムにしたり、固い素材、柔らかい素材をつかった」との記述からは、3週にわたる3つのワークショップによって、学生は各表現素材の質感を融合させて感受していることがわかる。

また、「自分の感じた擬態語を表すということを通してオノマトペの幅が広がり、作品創作に活かされた」の記述のように、第1段階の体験が、「オノマトペ」をキーワードとして、造形・音・身体活動を往還したことは総合表現を目指す際の重要要素であることがわかる。

「想像する・オノマトペで表現する・相手を感じる」の3点が表現する際の感性と関わり深い。3つの表現素材のいずれにも共通するこれらの感性を得て学生は第2段階、第3段階の表現創作へと進んでいった。

3. 第2段階の意義

第2段階は「表現素材の連携」と位置付ける。第5回では第1段階で経験した心の動きを声と身体の動きで表現しようと進めた。各自から出てきたその表現モチーフは一瞬のものであったが、一人ずつ順にすると表現のつながりになり、時間軸が生じる。第2段階の意義の一つ目は、表現モチーフをつなげて一連の表現にするという表現技法を体験したことである。それを見える形にしたものがオノマトペ譜である。各自の表現モチーフを画材で表し、メンバー全員のものをつなげたのである。

声や身体の動きで表現することに慣れてきた第6回には、楽器の音も加えて「○○の散歩道」のテーマで創作表現をした。アベックの散歩道、雨の散歩道、のように各グループでテーマを決め、ストーリーを持たせて表現を作った。ここでは向こうへ歩いていく、戻っ

てくる、人が出会う、のように空間性が生じた。第2段階の意義の二つ目は各自の異なる表現モチーフを同時に行う技法を体験したことである。

第2段階において「表現素材の連携」を意図的に行えるような展開とした。グループ発表からはその成果が見られたのであるが、「表現素材の連携の技法」として上記の2点を学生とともに確認する必要があったであろう。なぜなら、そのことを学生が意識して第3段階の表現創作の際に積極的に生かしていけたのではないかと考えるからである。また、表現モチーフを繰り返す技法、一つの表現モチーフの圧縮・拡大も有用である。これらの体験については十分であったとはいえず、今後課題として残る。

4. 第3段階の学生の学び

表現創作に取り組みだした各グループはもととなる絵本、歌を何度も見て読み、室内にある小道具、手具、楽器をさわって、表現に活かさないかと試みた。図形楽譜のグループは形の変化に声、音をつけようとした。イメージの色の物を手にしては表現を作ろうとしていたが、なかなかアイデアが出ず、苦戦していた。そんな中でも言葉のリズムに気づきそれを活かした動きを考えるなど少しずつの進捗であった。中間発表でお互いに見あい、中間発表時のビデオ視聴を経て、各グループの表現創作への取り組みが明らかに意欲的に変わっていった。それ以降、用いる小道具、手具を最小限に減らし、自分たちがたくさん体を動かし、たくさん声を発して創作表現を作りあげていった。そして幼稚園児を迎えての発表会に臨んだ。

このような変容に着目し、振り返りシートでは「表現の仕方、感じ方などに関してあなたの中で変わったことは何ですか。またそれはいつ、どのように変化しましたか」と尋ねた。学生の振り返りシートからそれらを抜き出してカテゴライズすると、変容の要因をa～fの6つの項目に分けることができると考える。各要因によると考えられる変容を以下に示す。

a. 表現内容の解釈の深まり

「表現内容の解釈の深まり」に関する振り返りシートの記述を表5に示す。

表5 表現内容の解釈の深まりによる学生の変容

学生の具体的な記述 ()内は取り上げた題材
<ul style="list-style-type: none"> 「詩を読み込むうちに」(ぴっとんへべへべ)「本のイメージが水と一致したことで」(ごぶごぶごぼごぼ)身体表現の動きが思いつき深まっていった。 言葉の解釈をしていくと自然に身体表現が思いつくようになった(ぴっとんへべへべ) 絵本を読み込むことで絵本の真の意図を感じ、内面からの気持ちの変化もあった。(あみだだだ) 五七五のリズムになっているところが魅力的に感じた(ばびぶべぼ) 図形楽譜を見ているうちにそれがとてもおもしろいテーマだということに気づきました(おばけのぼうけん)

各グループに提示された絵本、歌、図形は具象を描いたものではない。学生らはまず難解だと感じた。解釈をしようと懸命に取り組んだ。知識理解による解釈とは別の、各自が感じるままに解釈する仕方でお互いの意見を聞きあう中で、言葉のリズムに気づき出し、絵、図形の形に意味を見出し始めた。表現内容の解釈の深まりは、新たな感性の芽生えであったと考える。

b. 自身の固定概念への気づき

「自身の固定概念への気づき」に関する振り返りシートの記述を表6に示す。

表6 自身の固定概念への気づきによる学生の変容

学生の具体的な記述 ()内は取り上げた題材
<ul style="list-style-type: none"> 活動当初を振り返って「言葉にあった音を決めるだけで満足していた」「言葉にとらわれていた」「こういう風に動かなくちゃいけないと(中略)自分の中で枠を決めながら表現していた」など自分たち自身の中に固定概念があることに気づいたことからその枠(型と表現する学生も有)を脱していった。(ごぶごぶごぼごぼ) (3つの領域をの授業を受けたことによって:筆者補足)、自分の思いを自由に出すことや想像することを学んだ。普段自然と「こうしなければならない」「みんなと同じがいい」と生活しているので、それとは違う大切さを学べたと思う。(ぴっとんへべへべ) 台詞という台詞も無い中、思うがままに演じた(ばびぶべぼ) 自分が想像もしていなかった表現の仕方を知ることができた(ばびぶべぼ)

各グループは表現の最小単位を声、音、または動きで表現を試みるようになった。そうすることによって固定概念を取り払い、これまでに経験したことがないような、新たな表現方法を知ることとなった。新しく

感性のままに表現するように変容していった。

c. 表現の多様性への気づき

「表現の多様性への気づき」に関する振り返りシートの記述を表7に示す。

表7 表現の多様性への気づきによる学生の変容

学生の具体的な記述 ()内は取り上げた題材
<ul style="list-style-type: none"> 言葉だけにとらわれず身体や声で表してみたりすると自然と笑いが起こって、表現することで通じ合ったりすることがわかりました。(ぴっとんへべへべ) 表現の仕方や感じ方が変わってきたのはみんなの発表を見ていく中で(中略)みんなそれぞれちがっていて、同じより違うほうがおもしろいと思った。(ぴっとんへべへべ) 言葉がなくても物・楽器・歌を取り入れることで表現が変わった。(いろいきてる) 言葉のイメージの思い込みでなく、顔の表情などの工夫により様々な表現の可能性を感じた。(いろいきてる) イメージを考えることはできても、それをどう動きとして生み出していくかが私の中でとても難しく苦手な部分だった。(中略)「やってみる」ことを繰り返し、物足りなさや違和感を見つけて改善することで完成に近づいていった。強弱をつけたり一定のリズムの中で動きを作り出したり、他のグループの子どもを巻き込むことなどの表現のバリエーションを学んだ。(あみだだだ)

「言葉だけにとらわれず」「言葉のイメージの思い込みでなく」等の記述から、学生たちは絵本の世界を表現するにあたって、文中に示されている言葉による表現のみならず、身体の動き、声の使い方、顔の表情といった自分の体を使うことや楽器の響きを聞いて、それらを表現に生かすことを体験していた。また、「みんなそれぞれちがっていて、同じより違うほうがおもしろいと思った」と他者との違いに気づく学生や、表現のバリエーションについて、リズムやコミュニケーションの面から論じている記述も見られた。「表現」と一言で言っても、自分が表現する方法にも様々な方法があり、また他の人との違いの面白さ、楽器や物と組み合わせることで表現がさらに複雑に広がっていくこと、どのように観る側とコミュニケーションを図っていくか、等といった「表現の多様性」に気が付いていることが読み取れた。

d. 客観性の獲得

「客観性の獲得」に関する振り返りシートの記述を表8に示す。

表8 客観性の獲得による学生の変容

学生の具体的な記述 ()内は取り上げた題材
<ul style="list-style-type: none"> 毎回の振り返りや中間発表で「他の人の作品を見て」(ぴっとんへべへべ)「見る側の人にも伝わるように」(ごぶごぶごぼごぼ)考えるようになった。 言葉にたよらないことで自分のしたことが客観的に見えるようになった。(いろいきてる) 最初は作るのも聞くのも『?』でいっぱいだったけれど、いつの間にか音や響き、身体の動きに関心を持った。(中略)音だけでもさみしい。動きだけでもさみしい。しかしこの二つがコンビになると本当に面白い。(ばびぶべぼ)

第3段階の授業では、毎回グループごとに進捗状況の報告を行った。また、第10回の授業で中間発表を行い、その映像を第11回の授業で視聴した。これらは学生に制作の見直しを持つことと、他者からの刺激を受けて表現の広がりを生むこと、映像視聴によって、自分の表現がどのように見えているのか自覚すること、をねらいとした授業設計上の工夫である。これらの活動を受けて「毎回の振り返りや中間発表で「他の人の作品を見て」「見る側の人にも伝わるように」考えるようになった。」と「見る側」の視点を獲得していた。

さらに、多くの学生が「音や響き、身体の動きに関心を持」ち、創作活動を進めていくうちに「言葉にたよらないことで自分のしたことが客観的に見えるようになった」と自分たちの表現を顧みる客観性を獲得しながら、なお表現を深めていく姿勢が見られた。これらの活動を経て「音だけでもさみしい。動きだけでもさみしい。しかしこの二つがコンビになると本当に面白い」と表現内容を枠にとらわれず自由に組み合わせで面白さを見出し、独自の表現内容を創り出していた。

e. 身体の動き

「身体の動き」に関する振り返りシートの記述を表9に示す。

表9 身体の動きによる学生の変容

学生の具体的な記述 ()内は取り上げた題材
<ul style="list-style-type: none"> 身体や声で表してみると自然と笑いが起こって「話し合って言葉を体で動かして表現するように」(ぴっとんへべへべ)しようと決めたことや「もの頼りでなく自分たちがたくさん動くことを心掛け」(ごぶごぶごぼごぼ)るようになった時からいろいろな表現ができるようになった。 イメージから動きへとりあえず体を動かしてみるうちに物足りなさや違和を感じて改善していった。(あみだだ)

- 音に支配された動きは溶け込み笑いを生む(ばびぶべぼ)
- 小さな動きから大きな動きができるようになっていて自分でも驚きました(ばびぶべぼ)
- 造形表現、身体表現を使い作品を作っていた(ばびぶべぼ)
- 誰よりも大きな動きを心がけようと思うようになりました。すると表現している私たちからも自然と笑いが起きてくるなど表現を楽しめるようになりました(ばびぶべぼ)
- 自分が楽しんで表現していることに気づきました(ばびぶべぼ)
- 人によって表現法は違うんだ、と感じてからは「こんな表現おもしろそう、この動きにあえてこんな音はどう？」など想像のつかない表現法を思いつくことが楽しく思えました(おばけのぼうけん)
- 実際に楽器や音を使ったり、体を動かすことで表現の仕方を学んでいった(おばけのぼうけん)
- 動きながら考えてみる、動いてみた方が表現の幅が広がるということに気づく(おばけのぼうけん)
- とりあえず身体を動かしてみようと思い、みんなで身体を動かしてみたとき、表現が変わった。頭で考えることも大切だが、とりあえず身体を動かしてみても見えてくるものがあるということを知った。(あみだだ)
- ものに頼っているということに気づきました。そこで私たちの表現の一部、発展部分でもものをつかうという位置づけにしました(おばけのぼうけん)
- 物を多く使い物に頼るのではなく自分たちがたくさん体を動かし自分たちの作品を作るよう心がけた。(ごぶごぶごぼごぼ)

この項目については振り返りシートの記述において最も多くの気づきが見られた。作品創作の過程で学生たちの取り組みの様子を見てみると、まず提示されている絵本・歌・図形などを解釈するために何度も読み返したりしながらグループで検討をするのであるが、次の取り組みとして見られるのは小道具の制作であり、実際に身体を動かしての活動が見られるようになるのは中間発表のリミットが迫ってくるころである。第1段階・第2段階の経験を踏まえて、様々な技法を連携させた作品の創作が重要であるのはもちろんであるが、抽象的な事柄を身体で表現するということが学生にとって非常にハードルの高い活動であることが感じられる。第3段階の作品創作の過程で毎時最後の20分程度をその時間内にグループが作った作品のモチーフ等を発表する時間に当てたが、この課題により各グループは体を動かすことにも意識を向けざるを得なくなり、有効な手立てであったのではないかとと思われる。

また、「もの頼りでなく自分たちが動くことを心がける」や「とりあえず身体を動かしてみることで見えてくるものがある」「動きながら考える方が表現の幅が広がる」といった振り返りにもあるが、中間発表の録画を各グループで見て自分たちの動きを客観的に確認することで身体で表現することの重要性に気づいていったと考えられる。

f. 相互の尊重

「相互の尊重」に関する振り返りシートの記述を表10に示す。

表10 相互の尊重による学生の変容

学生の具体的な記述 ()内は取り上げた題材
<ul style="list-style-type: none"> 相手に伝えることを学び、自分たちだけでなく見る側の人にも伝わり楽しいと感じてもらえるように (ごぶごぶごぼごぼ) 同じチームのみんなが私の意見に耳を傾けてくれる機会が多く (ばびぶべぼ) 人によって表現法は違うんだ、と感じてからは「こんな表現おもしろそう、この動きにあえてこんな音はどう？」など想像のつかない表現法を思いつくことが楽しく思えました (おばけのぼうけん) 私だけの表現方法ではなく、みんなが表現の案を出していくことで面白いものになっていくのが実感できた。(中略) みんなから出たアイデアをとりあえず試してみるようになって、意見が言いやすい環境だったことも作品作りに取り組もうとおもえた。(ごぶごぶごぼごぼ)

今回の作品創作ではグループメンバーで協力して作品を作り上げることの達成感を感じて欲しいというのが指導者側の一つのねらいであった。振り返りシートの記述としてあげられたものから、メンバーによる「相互の尊重」とカテゴリズできるものはいくつか見られた。単なる創作の協力だけではなく、「自分の意見を取り入れてもらえた」「他のメンバーの意見に耳を傾け、みんなで出し合って面白いものに変えていった」という記述にもみられるように、相互の信頼・気遣いなどお互いを尊重することの大切さに気づいたことで変容があったと捉えている。

V. まとめ

今回の「総合表現Ⅲ」の活動を経験することにより、学生は多様な表現方法を修得し表現力を豊かにすることができたのではないかと考える。第1段階・第2段

階での経験が作品創作に活かされたと考えられることから、各表現分野の素材の探求は有効であり、それらを連携させたオノマトペを用いた活動の経験は重要であったと考えられる。これまで学生が総合的な表現活動としてイメージしていた劇遊びやオペレッタなどのある程度型にはまった表現から離脱し、感じたことを自由に表現して作品を作り上げるということは保育者を目指す学生の感性を豊かにする経験になったのではないかと考える。とりわけ、作品発表に向けた学びの変容の中で、素材や用具の使用のみに頼らない表現の重要性を認識していったことは意義深い。メンバーが協力して作品を作り上げていくプロセスの中での学びも非常に貴重なものである。テーマを提示した当初は完成形の見えないものを作り上げることへの不安を示す学生が多く見られたが、次第に保育者として感じたことを表現することの重要性に気づいていく者もみられた。

学生の表現の深まりの転換点を的確に捉え、適切な助言や援助をすることがさらに深い、豊かな表現力育成や感性の獲得につながるであろう。特に、身体を使っでの表現をもっと気軽に、自由にできるような環境設定や経験が必要となるであろう。指導者の力量の確保や身体の動きを引き出すような声かけを意識することが課題と考えられる。指導者側の用具や素材選択の観点や映像による動きの確認の活用について、さらに検討を重ねていきたい。

付記

本稿は日本保育学会第72回大会ポスター発表「総合表現のころみ—音・動き・素材の探求を通して—」(2019年5月、於：大妻女子大学)の内容を整理し、加筆したものである。

注

作品創作で取り上げた絵本、歌、図形楽譜を以下に挙げる。

- ・駒形克己著 『ごぶごぶごぼごぼ』 福音館書店 1999
- ・おおたか静流 作詞作曲「ぴっとんへべへべ」『NHK にほんごであそぼ じゅげむ編』(CD) ワーナー

ミュージックジャパン 2004

- ・「〇の話」中島恵子・山下恵子『音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー』春秋社 2002.p.27 より
- ・元永定正 文・絵『ぱびぷべぽーいろながれかたちうごいて』光村教育図書 1999
- ・谷川俊太郎 文・元永定正 絵・中辻 悦子 構成『あみだだだ』福音館書店 2014
- ・谷川俊太郎 文・元永定正 絵『いろ いきてる!』福音館書店 2008

引用文献

- 1) 山田悠莉・滝沢ほだか・横田典子「造形・音楽・身体表現を連携させた保育内容「表現」の授業実践(6)－発表内容から課題提示順序を振り返る－」日本保育学会第72回大会論文集 2019

参考文献

- ・後路好章『絵本から擬音語・擬態語 ふちふちぽーん』アリス館 2005
- ・川原繁人『音とことばのふしぎな世界』岩波書店 2018
- ・窪園晴夫編『オノマトペの謎』岩波書店 2018